

鳥海山の植物事前研修会及び現地観察会実施

今年度当会事業として研修会「鳥海山の植物事前研修会」、及び自然・史跡観察会「鳥海山の植物現地観察会」を下記の通り実施しました。

I 研修会「鳥海山の植物事前研修会」

開催日時 5月17日 13時30分～
会場 由利本荘市西目町シーガル
講師 当会会員 茂野正信 氏
演題 「花の百名山鳥海山」

いろいろな行事が重なり、参加者が少ないのではと心配しましたが、先行行事をこなした後駆けつけてくれた会員もおり、48人の参加者で開催することができました。

始めに鳥海山の植生の特徴として、西鳥海（象潟側・日本海側）と東鳥海（矢島側・内陸側）とでは植生が違う点があるため、植物観察では鳥海山は東西で2度おいしい山であること。また鳥海山は亜高山帯を持たず、偽高山帯が成立している山であるとの話がありました。



鳥海山は、春の白色、夏の黄色、秋の紫と季節の移ろいが花の彩りにはっきり現れる山であること。ヒナザクラ、ミヤマウスユキソウなど鳥海山を基準標本とする高山植物があることなどが紹介されました。

その後、この花の百名山として有名な鳥海山の高山植物について、象潟口登山道を起点として、頂上から矢島口（祓川）まで順を追って写真を見ながら、高山植物の名前の由来や、特徴などについて説明がありました。また、高山植物観察登山ルートについて紹介もありました。

II 鳥海山の植物現地観察会

7月12日（日）、実際に鳥海山に登り植物観察を行いました。参加者は14名と少数でしたが、天気も上々で、ちょうど高山植物の適期でもあり、参加者一同お花畑を堪能しました。

当日は午前6時30分に市役所に集合し、車に分乗して鳥海山吹浦口に向かいました。7時半頃登山口に到着、登山口でにかほ市からの参加者と合流し、七合目御浜を目指して登り始めました。

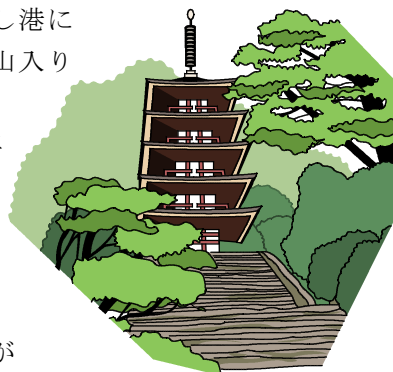
登り始めの樹林帯の急坂に一同喘ぎながら、時折木々の間から見える観音森や日本海までの雄大な風景に癒やされながら、約一時間で「見晴台」に到着。ここから上は勾配も緩やかとなり、いよいよ高山植物もちらほら見え始めます。ゴゼンタチバナ、ハクサンチドリ、ヨツバシオガマなどが登山道の両脇に咲いていました。「清水大神」手前から、チングルマの群落があちこちに見られ、「とよ」にさしかかったころからは、登山道はまさにお花畑に囲まれていました。見晴台からおよそ50分で「河原宿」着。雪渓に足を取られながら、長坂道分岐まで約30分。ニッコウキスゲの大群落が一同を迎えてくれました。お花畑越しに雄大な鳥海山が聳え、参加者一同しばし疲れを忘れ眺めていました。ここで休憩する人、七合目御浜に向かう人に分かれ、それぞれ花の鳥海山を楽しみました。下山12時30分～登山口15時着



火合わせ神事ならぬ注連寺研修記

7月14日、希望会員による飛島の火合わせ神事一泊研修を企画し港に向かいましたが、非情(?)にも欠航となり、六十里越街道の湯殿山入り口にある「注連寺」を急遽研修することになりました。

「注連寺」は、「湯殿山大本山中連寺」が正式名称で、天長10年(833年)弘法大師空海が東北巡鑄で辿り着いた七五三掛(しめかけ)の地の桜の木に注連縄を張り檀を築き、湯殿山の本地佛金胎両部大日如来の御尊像を刻み安置したのが開基と伝えられています。



ご本尊「大日如来」は6年(丑年・未年)に一度御開帳で、今年がその年にあたっています。また、昭和49年芥川賞受賞の名作「月山」は、森敦が昭和26年晩夏からひと冬を過ごした体験を元に書いた小説であり、それを顕彰して月山文学碑を正面入り右に建立しています。

弘法大師が樹下で修業したという七五三掛(しめかけ)桜は「かすみ桜」で正面左にあり、開花時には白色から桃色に変化する神秘的な魅力を持ち、映画「遠野物語」でも幻想的な効果を果たしています。

本堂内には、左側面に湯殿山信仰布教に大きな業績を残した「鉄門海上人」の即身仏が安置され、天井には故村井石齋画伯と4人の洋画家による競作が設置されています。

「鉄門海上人」は「恵眼院鉄門海上人」といい、昭和5年(1768年)鶴岡市に生まれ、25歳で同寺第69世寛能和尚の弟子となり「鉄門海」の名をいただき一世行人となりました。湯殿山仙人沢で修行し、眼病で悩む人々の為に自身の左目を隅田川の龍神様に捧げ祈願、加茂坂に隧道をつくるなどし、湯殿山信仰布教にも大きな業績を残しています。

天井絵画、いずれも天界と俗界の接点を見立てた秀作です。

本尊が現れんとするばかりの臨場感あふれる「天空之扉」、真言密教の象徴である曼荼羅絵図を連想させる「聖俗百華面相図」、愛の世界を2頭の馬で表現する「白馬交歓図」、生命の源泉と言われる海を頭上に表した「水の精」では、見るものを海底に引き込むようにメルヘンの世界に誘い込みます。他にも「天女飛天」「龍神」なども描かれ、宗教性を厳かに顕す伝統的な世界と現代性が共存する不思議な空間です。

また、鰐口は、五尺三寸、百貫目で日本最大級と記されています。

(以上配布冊子等の説明内容より抜粋)

我々は、入り口に設置された御柱に触れ寺内に入り、本堂内を丁寧な案内に誘導されながらゆくと拝観し、思いに浸りました。やや遠くからの秘仏拝顔や近くの即身仏。仰ぎ見て説明の悦に入った天井絵画、最後に見た座敷からの出羽三山方向の景観など心洗われた一時でした。

帰り際に本堂土台の傾きに心痛めたのも貴重な研修でした。(小川征司 記)

秋の研修会「講演会」を開催しました。

秋の研修会「講演会」を10月18日(日)、会場西目シーガルで開催しました。

*演題「熊との出会い」

*講師 加藤明美 氏(秋田県写真協会会長)

当日は市内で各種事業が行われており、参加者が少ないのではと心配しましたが、43名の参加を得ることができました。

加藤先生は19才頃から写真を撮り始め、30年前ぐらいからは森の動物をテーマとして、特にカモシカを中心として撮影してこられました。ある日、いつものように森でリスの撮影中、頭上の木の上で熊を発見し、撮影したことから熊の写真を撮るようになりました。



秋田市仁別の森をフィールドに加藤先生が撮影された100枚以上にも及ぶ熊の写真を見せていただきながら、時には動画を交え、知っているようで知らない野生の熊の生態について大変興味深いお話を伺うことができました。そのお話し的一端を紹介いたします。

現在秋田県には、1000頭ぐらいの熊が生息しているようですが、先生によれば、秋田市仁別ザブーン周囲1kmの森に5頭は確実に生息しているそうです。それから類推すると県内にはもっと多くの熊が生息しているもおおかしくないと言われました。県内の生息分布を見ると本荘由利地域はそんなに多くなく、平成27年の熊の目撃件数は由利本荘市、にかほ市でそれぞれ21件となっています。

先生は車に乗る時に、ラジオなどを消し五感を働かせ、動物の気配を感じるようにしているそうです。熊は食べ物があるところ、隠れるところがある（例えば杉林）場所にいるそうです。そんなところを、五感を働かせ、熊が来ると予想しながら待っていると熊に出会えるのだそうです。



林道を歩く熊

熊の食べ物は、春は山菜、サクランボ、ブナの花芽、木の芽。夏はヒメコウゾ、桑の実は大好物。秋はミズキの実、栗、ドングリ、ブナの実、サルナシ、ヤマブドウなどを食べています。したがって、春は、サクランボのたくさんなっている桜の木に見当をつけて、熊が来ると予想し待っているそうです。桜の木に登って夢中でサクランボを食べている熊を撮影した写真を見せていただきました。また、桑の実も大好物で、仁別国民の森の車道脇にある桑の木の実は、たいがい熊が食べているそうですが、その熊を見た人はほとんどいないそうです。実は車が走っている傍らで熊たちが活動していることを、私たちは知らないというこのようです。熊はヒメコウゾ、ミズキの実も食料としてかなり依存しており、木に登り、かなり細い枝の実にも手を伸ばします。その結果木から落ちる熊の写真もを見せていただきました。またクルミは1回で50個くらいは食べるそうで、木に登り実を地面に落としてから食べ、外果皮を吐き出して、堅い実はバリバリ噛み砕いてそのまま食べるそうです。太い枝などは、折るというより、かじり取り、枝ごと下に落としてから実を食べるそうです。直径9cm程度の枝をかじって落とした写真もを見せていただきました。ドングリは器用に皮をむいて食べていることがわかる写真もありました。また、子熊は必ず親の食べたものを、自分でも食べて見るのだそうです。

森に落ちていたペットボトルで遊んでいる熊、木の上で腹ばいになって昼寝をしている熊、器用に木に股を絡ませて枝先の木の実を盛んに食べている熊の写真、動画などを見せていただき、熊は日頃私たちが考えている以上にいろいろなものを食べ、知恵を働かせ、森の時間の中で悠然と生きているのだなとつくづく感じました。



ペットボトルで遊ぶ熊

熊と出会ったら、興奮させない、大声を上げない、背を向けない、動作はゆっくりだそうです。熊はとにかく人が嫌い、第一に人に会わないように逃げる、第二に隠れる、そして襲う、だそうです。熊の能力、嗅覚は100m先でも臭いを感じるようだし、聴覚も優れており、視力も考えられているより良いのではないかとおっしゃっていました。

今年のようにブナの実が豊作の年の翌年は熊が増え、熊による被害が多くなるそうです。そこで熊と合わない方法として、やはり鈴、ホイッスルなどを鳴らす、もしかの時のために熊の忌避スプレーを持参するなど対処してほしいとのことでした。

野生の熊のこれほど多くの生態写真を見たことがありませんでした。漫然と森の中を歩いただけでは、これほど多くの動物の写真を撮ることはできないと思います。やはり先生のように五感を働かせ、森の空気を感じ、森と一体にならなければ、動物たちが近づいてくることはないと思います。森の中に椅子を据えてじっくり待つ、という先生の撮影スタイルがそれを物語っています。またその撮影姿勢や写真は、動物に対する畏敬の念の表れではないかと感じられた講演会でした。